

平野秀吉が作詞した校歌と  
作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平

榎田善衛

一 はじめに

新潟県内の小中学校および高等学校の校歌を調べると、平野秀吉が作詞したものが意外に多いことに気がつく。

新潟県の校歌をまとめた『校歌の風景―中越地区小中学校論考―増補版』によると、「終戦までの公立小学校において、『校歌』という名称は正式に存在していなかった」とし、「校歌は『小学唱歌』と総称される歌の一つに過ぎ」ず、「学校で児童にうたわせるためには、文部省の許可を受けることが必要であった」としている<sup>1</sup>。校歌制定の契機は「明治二十四年」に発布された「祝日大祭日儀式規程」にある<sup>2</sup>。これは「いわゆる文部省による校歌認定制度の始まり」であり、「校歌の歌詞や曲を大きく規制する役割を果たした」が、「この省令以降、校歌制定の機運が全国的に広がっていったようである」<sup>3</sup>。「わが国で最も古い校歌とされているものは、(略)東京女子師範学校(現、お茶の水女子大学)の校歌」であり、「明治九年に明治天皇の

后、美子皇后から下賜された和歌に、明治十一年、式部省の東儀季熙が曲をつけた」ものである<sup>4</sup>。その他、初期のもので制定年がはっきりしている校歌は、「東京下谷区忍ヶ岡小学校校歌(明治二十六年制定、木村正辞作詞・上真行作曲)、福島県郡山市金透小学校校歌(明治二十八年制定、小中村清矩作詞・奥好義作曲)、長野県松本市旧開智小学校校歌(明治三十年制定、浅井冽作詞・小山作之助作曲)」である<sup>5</sup>。また、「明治三十五年、旧制第一高等学校の東寮歌『嗚呼玉杯に花うけて』や『明治四十年、早稲田大学の校歌『都の西北』」が制定されると、「一般にも広く愛唱」され、「中学校や高等学校だけでなく、小学校においても校歌がさかんに制定される」ようになり、「儀式だけでなく、それ以外のさまざまな機会であたわれるようになって」<sup>6</sup>。戦後、文部省による許可制度が廃止されると、戦前・戦中と歌い継がれていた校歌はつくりかえられる事例が見られる一方、現在に至まで歌い継がれている事例も見受けられる。

そこで本研究では、平野秀吉が長年勤務した新潟県高田師範学校(以下、高田師範学校)の校歌と、現在も歌い継がれている平野秀吉作詞の校歌を紹介するとともに、その校歌の作曲を手がけた小林禮、田中信太郎、小出浩平の人となりについて紹介する。さらに、平野秀吉作詞の校歌がつくられた年代や経緯、作詞内容について示すとともに、作詞者平野秀吉と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平と高田師範学校の関わり合いについて論じる。このことで、高田師範学校が築いた

<sup>1</sup> 折原明彦『校歌の風景―中越地区小中学校論考―増補版』野島出版 2006, p. 6-7。

<sup>2</sup> 前掲 1, p. 10。

<sup>3</sup> 前掲 1, p. 10。

<sup>4</sup> 前掲 1, p. 9。

<sup>5</sup> 前掲 1, pp. 10-11。

<sup>6</sup> 前掲 1, 2006, p. 11。

音楽教育の伝統が新潟大学高田分校や上越教育大学の設置に大きな影響を与えたことを明らかにできるはずである。ちなみに、本編で紹介する校歌は全部で七曲。平野秀吉作詞・小林禮作曲の校歌が四曲、平野秀吉作詞・田中信太郎作曲の校歌が二曲、平野秀吉作詞・小出浩平作曲の校歌が一曲である。

## 二、平野秀吉作詞・小林禮作曲の校歌

### (1) 小林禮の人となり

小林禮の略歴と制作校歌はご令孫関美智子氏の『小林禮ものがたり―祖父の足跡を訪ねて―』<sup>7)</sup>を参考にまとめると表1のとおりとなるが、本編をすすめる上で特に重要だと考えられる経歴を次に抜粋した。

小林禮は一八八四(明治十七)年に生まれる。出生地は浅草(東京都)と柏崎市(新潟県)の二説があるが、どちらであるか明らかになっていない。一九〇〇(明治二十三年)に東京音楽学校に入學。滝廉太郎氏のドイツ留学送別音楽会でピアノ独奏を行い、賞賛を得る。また、一九〇三(明治二十六)年十二月、卒業を目前にして東京音楽学校を中途で退學。その後、三年余を東京で生活。この間のことを本人は「ケーベル博士につき、ドイツ語、ピアノを専修し、ペリー氏につき唱歌並びに和声楽式を研究」と履歴書に記載。また、この間、最初の夫人高橋とよと結婚。一九〇七(明治四十)年二月、山梨師範学校に音楽授業囑託として赴任。甲府にて生活。長女英子誕生と妻の死、師範学校・中学校・女学校唱歌科の教員免許

状取得による教諭昇進、次の夫人里見いねと再婚。一九一〇(明治四十三)年十月に山梨師範学校を依願退職し、東京で生活。三越呉服店囑託ピアノ教授として少年音楽隊を指導。一九二二(大正三元)年十月に二女正代が生まれ、同年十一月に三越呉服店を辞職。同年十一月に高田師範学校に赴任。一九二二(大正十二)年八月に愛知県立第一高等女学校に赴任するまでの、九年十ヶ月間を高田師範学校の教師として過ごす。一九二六(大正十五)年四月に私立櫻菊女子学園に赴任。一九四四(昭和十九)年四月、腎臓病が悪化し、名古屋にて死去。葬儀は名古屋で行い、墓は本龍寺(柏崎市鶴川)。戦争の激化により法要等が難しく、終戦直後、教え子有志、山田耕筈、高折安治(ピアニスト)らの協力により、納骨及び法要が執り行われた。

前述の「一九二二(大正元)年十一月に高田師範学校に赴任。一九二二(大正十一)年八月に愛知県立第一高等女学校に赴任するまでの九年十ヶ月間を高田師範学校の教師として過ごす」という記載が特に重要である。なぜならば、この九年十ヶ月の間に、平野秀吉が作詞し小林禮が作曲した校歌は五曲(高田師範学校の場合、旧譜と新譜あり)が制作されているからである。

平野秀吉が作詞し小林禮が作曲した校歌は四曲ある。そのうち、既に閉校した高田師範学校の校歌と現在も歌い続けられている校歌三曲を制作年代に従って、制定年、経緯、校歌を示すと次のとおりとなる。

### (2) 校歌紹介

- ① 校名 新潟県高田師範学校(旧譜・新譜)

7 関美智子『小林禮ものがたり―祖父の足跡を訪ねて―』関美智子,2011,75p.

《制定》一九一六(大正五)年(平野秀吉四十四歳、小林禮三十三歳)。一九二二(大正十)年曲変更(平野秀吉四十九歳、小林禮三十八歳)。《経緯》校歌制定の経緯として「大正二年着任の五代中村校長は、急激に変化した時代相を察知して、新校歌制定の必要性を痛感した。そこで、当時の国語科担当の平野秀吉教諭に新校歌の作詞を命じた。(略)。そして、小林禮教諭の作曲によって、大正五年に新校歌として制定されたのであった。小林教諭の第一作は、軽快な行進曲風のものであったが、やがて校歌としては壮重さが望ましいという声が起こり、大正十年に同氏の手で現在の曲に改められ、今日まで歌い継がれてきている」とある。さらに、この校歌は官立新潟第二師範学校、新潟大学高田分校へと引き継がれ、「昭和五十八年頃まで歌われていた」とある。

《校歌》<sup>10</sup>

(一番) 正義(せいぎ)の雄(お)叫(たけ)び

義侠(ぎきょう)の軍(いくさ)

玄武(げんぶ)北斗(ほくと)の

星(ほし)闌干(らんかん)と

北越(ほくえつ)男子(だんし)の

氣(き)を世(よ)に吐(は)きし

春日(かすが)の山麓(さんろく)

四百人(よんひゃくにん)

(二番)

古人(こじん)に恥(は)ぢざる  
盟(ちかい)を結(むす)び

見(み)よ青春(せいしゅん)の  
抱負(のぞみ)は高(たか)し

夜(よる)綾亂(りょうらん)の  
吹雪(ふぶき)も霽(は)れて

白(はく)玲瓏(れいろう)の  
天地(てんち)を今(いま)や

朝日(あさひ)の光彩(ひかり)の  
陸(りく)たり離(り)たり

公明(こうめい)の心志(こころ)  
正大(せいだい)の氣宇(きう)

我等(われら)の心事(しんじ)を  
人(ひと)若(も)し問(と)は

見(み)せん高田(たかた)の  
此(こ)の雪(ゆき)の朝(あさ)

朔(さく)風(ふう)すさべど  
日(ひ)に身(み)を燬(や)けど

不撓(ふとう)の意氣(いき)には  
妙高(みょうこう)低(ひく)く

久遠(くおん)の修養(いそしみ)  
荒川(あらかわ)ちかし

剛健(ごうけん)の精神(こころ)  
質樸(しつぼく)の風(ふう)

浮華(ふか)柔弱(じゅうじやく)の

(三番)

朔(さく)風(ふう)すさべど

日(ひ)に身(み)を燬(や)けど

不撓(ふとう)の意氣(いき)には

妙高(みょうこう)低(ひく)く

久遠(くおん)の修養(いそしみ)

荒川(あらかわ)ちかし

剛健(ごうけん)の精神(こころ)

質樸(しつぼく)の風(ふう)

8 記念誌編集部『公孫樹下の八十年』公孫会会長笠井永吉,1982,p.80-81。  
9 前掲7,p.6。  
10 読み仮名は平成二十七年五月十日(日)、下村省一(高田師範学校卒業生)への電話調査による。

花香（はなか）をよそに

くもらぬ特色（こころ）を

帽章（しるし）の鏡（かがみ）

（四番）下（お）り立（た）つ校庭（にわ）の

朝夕（あさゆう）毎（ごと）に

崇高（すうこう）の木影（こかげ）

二本（ふたもと）の公孫樹（いちよう

仰（あお）げば尊（たか）し

我等（われら）の天職（つとめ）

DO YOUR BEST（ドゥユアベスト）

四百人（よんひやくにん）

其（そ）の名（な）を永久（とわ）に

母校（ぼこう）にとめん

母校（ぼこう）の譽（ほまれ）を

不朽（ふきゅう）にいさや

② 校名 新潟県中蒲原郡新津町立新津尋常高等小学校（現 新潟市立新津第一小学校）

《制定》一九一八（大正七）年九月二十二日〔平野秀吉四十六歳、小林禮三十五歳〕。

《経緯》『百年』<sup>11</sup>において、次の記載がある。

まずは、「校旗、校歌制定のいきさつ」について示す。校旗と校

<sup>11</sup> 新潟市立新津第一小学校百年祭実行委員会『百年』新潟市立新津第一小学校百年祭実行委員会、1972、pp.47-52。

歌が「正式に公定されたのは、共に同じ大正七年九月二十二日である。（略）。時の真柄校長<sup>12</sup>は、大正四年四月、新潟高等女学校長より転任。（略）。『大正四年新潟県学校職員録』（職員録としては一番ふるいもの）によれば、当時の尋常小学校は五六〇校、尋常高等小学校は三三三校、計八九三校。その中で校長の最高給者は五十円で五人。即ち、新潟尋高小、沼垂尋高小、新津尋高小、三条尋高小、長岡尋高小の各校長であり、真柄校長も一人に数えられていた。当時のわが校は二十八学級をもち、県下大規模校の一つであった。（略）。校長は、（略）、教育実践の趣味も県下有数なるものとするために、『教員資質の改善こそ急務』との基本方針を打ち出した。まず、教頭には、高田師範附属小の研究責任者であった外川純平を迎えた。ついで、新潟、長岡、高田の師範卒の中から、若くて優秀、やる気十分な教員をたくさん集めた。いつも研究意欲が溢れ、教科研究を重点とした刷新的な研究の雰囲気着々とつくり出されつつあった。研究授業がいくつかもたれ、本質論から細かい指導技術まで喧々たる討論が続く、夜まで延長されることがたびたびであった。わが校が『提灯学校』と言われたりしたのは、この頃の実態から名付けられたものと思われる。」

次に、「校歌の生まれるまで」について示す。作詞を平野秀吉、作曲を小林禮が担当したことを捉えて「どうしてこの先生方、近い新潟師範学校の先生ではなく、遠い高田師範学校の先生に依頼され

<sup>12</sup> 第十七代校長、真柄虎作。任期は一九一五（大正四）年四月十六日から一九一九（大正八）年三月十九日まで。〔新潟市立新津第一小学校百年祭実行委員会『百年』新潟市立新津第一小学校百年祭実行委員会、1972、pp.19-20〕

ることになったのだろうか」として、その理由について次の三点を挙げている。「一つは、(略)、外川教頭が高田附小より転任して来た人であることから頼み易かったこと、二つには、平野先生が新潟中学校在職中の教え子に、町の有力者の一人、後の町長桂圭三氏がいた。圭三氏は、終生、平野先生を師と仰ぎ尊敬していた。(略)。三つめは、何よりも、両先生ともその道には県内ではならぶ者なき高名者だったことによるのである。(略)。平野先生は同じ蒲原平野の出身者だけに新潟のことをよく知っておられ、それがよく生かされている。歌詞をみると、校訓の精神を採り、至誠と節操を教え、配するに新潟町の美点、長所をいくつかとり入れ三連に編まれている。(略)。曲は、へ長調、四分の四拍子、わかりやすい二部形式。どっしりとした重みを感じさせる曲である。」

最後に、「よろこびの公定式」について示す。「大正七年九月二十二日、校旗・校歌の公定式が講堂でもたれた。明治三十四年以來四十年間町長を勤めた大人物鈴木寅五郎町長をはじめ来賓多数参列のもと、全職員、児童、生徒に加えて同窓生も数多く参列してよろこびの式典が催された。(略)。校歌は、戦後、全然歌われなかった時期、二番までしか歌われなかった時期、『新しい校歌つくるべし』という声のあった時期など、歴史的なものの教育上の価値を認めない風潮が支配的になった多難なときを経てきている。現在は正しく歌われている」。

### 《校歌》<sup>13</sup>

<sup>13</sup> 読み仮名は平成二十七年六月二十四日(水)、新潟市立新津第一小学校への電話調査による。

(二番) 信濃(しなの)の川(かわ)と 阿賀野川(あがわ)の  
川内(こうち) さやけく 気(き) ははれて  
朝日(あさひ)に笑(え)むか 弥彦山(やひこやま)  
平原(へいげん)十里(じゅうり) 草(くさ)青(あお)し  
(二番) あかき心(こころ)を 秋葉山(あきはやま)  
木々(きぎ)のみみじの 色(いろ)にして  
操(みさお)を人(ひと)に かくあれと  
群(むら)立(た)つ松(まつ)の ふかみどり  
(三番) 越後(えちご)油田(ゆでん)の さきがけを  
煮壺(にえつぼ)新津(にいづ)の名(な)において  
くむともつきぬ わが里(さと)の  
栄(さかえ)はながし 幸(さき)清水(しみず)

③ 校名 新潟県能生町能生尋常高等小学校(現 糸魚川市立能生小学校)

《制定》一九二〇(大正九)年十二月二十日〔平野秀吉四十八歳、小林禮三十七歳〕。

《経緯》『能生町史下巻』<sup>14</sup>において、次の記載がある。「明治七年七月十五日、公立第十六番小学能生校が、能生町大字能生字上小町、通称、杉原校舎で、杉原余一・石栗宥光の二名の教師によって授業が始まった。児童数は四名であった」。また、校歌は「大正九年十二月二十日制定」、「大正九年十二月 能生町大字能生字アゴ田に新校舎落成し移転」とあることから、校歌は校舎移転と合わせて制

<sup>14</sup> 能生町史編さん委員会『能生町史下巻』能生町役場、1986.jp.183-184。

定したものと推察される。さらに、「節目<sup>15</sup>となった今年<sup>16</sup>、中越教育事務所伊野啓一先生より、ピアノ伴奏を現代風にアレンジし、歌い易いように編曲していただきました」とあり<sup>17</sup>、制定当初より曲が若干変化していると考えられる。

《校歌》

(一番) 弁天(べんてん) いわの

もちの岩(いわ)の

なせる自然(しぜん)の

ひろえどつきぬ

み恵(めぐ) みふかき

(二番) 仰(あお) げば高(たか)し

むすべば清(きよ)し

あゝわが心(こころ)

このうるわしき

くらべてはじす

いざ来(き)て学(まな)べ

(三番) 見(み)よ高山(たかやま)も

土(つち)の一(ひと)くれ

水(みず)なるものを

たゆむなうむな

行(おこ)なう善(ぜん)は

右(みぎ) ひだり

つらなりて

舟(ふな) だまり

大海(おおうみ)の

わが郷里(きょうり)

鉾(ほこ)が嶽(たけ)

能生川(のうがわ)の

わがのぞみ

山水(やまみず)に

劣(おと)らじと

人(ひと)の道(みち)

海原(うなばら)も

一(ひと)たりの

朝夕(あさゆう)に

怠(おこた)るな

小(しょう)なるも

はかゆく道(みち)は 短(みじか)きも

④ 校名 新潟県稲田尋常高等小学校(現 上越市立稲田小学校)

《制定》一九二二(大正十一)年十二月一日(平野秀吉五十歳、小林禮三十九歳)。

《経緯》『学び舎のうたが聞こえる—上越市内小学校校歌楽譜・歌詞集—』において<sup>18</sup>、次の記載がある。「稲田小学校は明治六年(一八七三)創立、校歌は大正十一年(一九二二)年の創立五十年を記念して制定された。(略)。歌詞の一番の『関川』は当初は『荒川』であったが、『関川』の名が一般的になったことから子どもたちにもわかるように変更された。(略)」。

また、『百年のあゆみ 稲田小学校』によると「大正十一年十二月一日(創立五十周年記念)制定」<sup>19</sup>、さらに「大正十一年十二月一日 運動場増改築 創立五十周年記念式並びに運動場落成式」とあり<sup>20</sup>、校歌制定は運動場増改築とともに創立五十周年記念事業の大きな柱の一つであったことが明らかとなった。校歌制定時の校長は十代目、片山寅治で、その在職期間は一九二二(大正十一)年八月から一九三〇(昭和五)年三月までの七年七ヶ月である<sup>21</sup>。

15 創立百二十年。

16 二〇〇四年(平成十六年)。

17 糸魚川西頸城小中学校PTA連合会『校歌集 校歌収録CD』糸魚川西

頸城小中学校PTA連合会、2004、pp.31-32。

18 上越市有線放送電話協会『学び舎のうたが聞こえる—上越市内小学校校歌楽譜・歌詞集—』上越市有線放送電話協会、2013、pp.15-16。

19 創立百周年記念誌刊行委員会『百年のあゆみ 稲田小学校』上越市立稲田小学校、1973、p.2。

20 前掲19、pp.19-20。

21 前掲19、p.91。

《校歌》<sup>22</sup>

(一番) 妙高(みようこう) 火打(ひうち) 万岳(まんがく) の

水(みず) を集(あつ) むる関川(せきがわ) を

やくして渡(わた) す大橋(おおはし) の

ゆきかいしげき人(ひと) くるま

夜(よる) 昼(ひる) 絶(た) えぬ轟(とどろ) きは

あなにぎわしき我(わ) が郷里(きょうり) きは

(二番) 山(やま) 紫(むらさき) に水(みず) 白(しろ) く

ねぐらに帰(かえ) るむら鳥(どり) も

深紅(しんく) の色(いろ) に夕(ゆう) 映(ば) えの

染(そ) むるかの町(まち) この林(はやし)

四時(しじ) みな佳(か) なる我(わ) が校(こう) の

(三番) 望(のぞ) みをよしと思(おも) わずや

文(ふみ) の林(はやし) も居(い) ながらに

たよりは多(おほ) き我(わ) が郷里(きょうり) きは

生(う) まれし幸(さち) を喜(よろこ) びて

うまずたゆまず朝(あさ) 夕(ゆう) に

学(まな) べ世(よ) の道(みち) 人(ひと) の道(みち)

三、平野秀吉作詞・田中信太郎作詞の校歌

(1) 田中信太郎の人となり

<sup>22</sup> 読み仮名は平成二十七年六月二十四日(水)、上越市立稲田小学校への電話調査による。

田中信太郎の全般的な略歴を調べることはできなかったが、現時点で明らかになっていることを示したい。

まず、田中信太郎は『新潟県上越音楽教育史資料』において<sup>23</sup>、次の記載がある。「大正十二年九月、東京音楽学校を卒業した新進バイオリニスト田中信太郎が本校<sup>24</sup>の音楽教師として着任」。続けて、「田中の着任は師範学校にとつても高田の音楽文化の面にとつても特筆すべき事である。すなわち本格的な洋楽の指導とアンサンブルの意義を知らしめ、また町の有志と提携して高楽倶楽部を結成、その指導に当たるなど活発にしかも多方面にわたる活躍を展開した」。さらに「翌大正十三年の第十九回音楽会には、みずからバイオリンの独奏をし、またバイオリン三部合奏などの発表を加えた。来賓として歌野金治(バイオリン)、宇田川雅子(ピアノ)などの演奏をおりこみ、一段と音楽会を充実させていった」と結んでいる。田中信太郎の新潟県における演奏および音楽教育活動は多方面にわたっており、その一端を次に紹介する<sup>25</sup>。

一九二四(大正十三年)年 十二・二十五―三十 高田師範学校で小学校教員のための冬期音楽講習。講師は同校田中信太郎教諭ほか。  
一九二六(大正十五年)年 十・二十二 新津高女卒業生有志の秋葉音楽高校会主催第一回演奏会。富士館。出演は塚田花子、田中信

<sup>23</sup> 新潟県上越音楽教育研究会『新潟県上越音楽教育史資料』新潟県上越音楽教育研究会、1967、pp.155-156。

<sup>24</sup> 高田師範学校。

<sup>25</sup> 関徹『新潟県音楽文化資料 明治・大正・昭和』越書

房、2010、p.79,89,90,93,94,111,121,136,138,141,142 (筆者野線引)。

太郎、大和田愛羅、氏家滋子。十一・二十三 高田高女第五回音楽会。  
高師田中信太郎、同校小関、安中教諭も出演。

一九二七（昭和二）年 五・一 ベートーベン百年祭記念演奏会。

高田師範学校。出演は鈴木寛、田中信太郎、山岸光尚、（略）。七・

十九 頤南教育協会の体操・音楽講習会。矢代校。音楽講師は田中

信太郎。八・一―五 高田師範校で音楽講習会。講師は田中信太郎

同校教諭と小出浩平東京赤坂訓導。最終五日には演奏会も。

一九二九（昭和四）年 三・三 加茂高女音楽大会。出演者田中

信太郎（高田師範・バイオリン）（略）。

一九三〇（昭和五）年 八・八―十二 高田師範校で唱歌の夏季

講習会。講師田中信太郎、久保田文枝、山岸光尚。

一九三二（昭和七）年 九・二十五 上越稲田校創立六十周年記

念ピアノ披露演奏会。出演山岸光尚（ピアノ独奏・高田師範校長）

田中信太郎（バイオリン独奏・高田師範教諭）（略）。十一・十九

糸魚川高女第十七回音楽演奏会。特別出演田中信太郎（高田師範・

バイオリン独奏）。パウルス夫人（ピアノ独奏）。十二・四 柿崎校ピ

アノ披露演奏会。特別出演田中信太郎、山岸光尚、（略）。

一九三三（昭和八）年 七・二十三 中頸下黒川校ピアノ披露演奏会。

山岸光尚、田中信太郎、（略）。八・七―十一 高田師範校で音楽講習会。

講師は田中信太郎同校教諭。尋常小学校用唱歌の歌い方ほか教授。

前述の「一九二七（昭和二）年 八・一―五 高田師範校で音楽講

習会。講師は田中信太郎同校教諭と小出浩平東京赤坂訓導」とあるこ

とから、田中信太郎は後述の小出浩平とともに音楽講習会の講師を引

き受けており、両者は既知の間柄であることが推察される。

また、『上越音楽教育史』によると<sup>26</sup>、「昭和十一年、田中信太郎は東京音楽学校研究科へ入学するため職を辞し」、（昭和）「十一年三月三十日、新潟から放送したが、それが田中信太郎教諭の転任送別記念となった」とあることから、田中信太郎は一九三六（昭和十一年）年三月末に東京音楽学校研究科入学のために高田師範学校を退職したことが明らかとなった。

つぎに、小出浩平の略歴を調べているところで偶然明らかになったことであるが、『東京音楽学校一覽 従大正十年至大正十一年』<sup>27</sup>の「甲種師範科 大正十年三月卒業」の欄に「小出浩平 新潟」を含む二十三名の中に「田中信太郎 東京」の名を確認することができた<sup>28</sup>。このことから、田中信太郎は小出浩平と東京音楽学校甲種師範科の同期卒業生であることが明らかとなった。

以上の記載から、断片的ではあるが田中信太郎の略歴をまとめると次の六点に集約される。①東京出身で、一九二二（大正十）年三月に東京音楽学校甲種師範科を卒業。②一九二三（大正十二）年九月に高田師範学校に音楽担当教員として赴任し、一九三六（昭和十一年）年三月末に東京音楽学校研究科入学のために退職。④専門はバイオリン。⑤高田師範学校時代は県内各地で演奏会や講習会の講師として音楽教育を推進。⑥東京音楽学校の同期卒業生として小出浩平がおり、東京音楽学校卒業後も交流が続いていた。

<sup>26</sup> 新潟県上越音楽教育研究会『上越音楽教育史』新潟県上越音楽教育研究会、1989、p.24,42。

<sup>27</sup> 東京音楽学校『東京音楽学校一覽 従大正十年至大正十一年』東京音楽学校、1921、p.104。

<sup>28</sup> 前掲27、p.104。



平野秀吉が作詞し田中信太郎が作曲し、現在も歌い続けられている校歌は二曲あり、制作年代に従って、制定年、経緯、校歌を示すと次のとおりとなる。

## (2) 校歌紹介

① 校名 新潟県小池尋常高等小学校 (現 新潟県燕市立小池小学校)  
《制定》一九二四 (大正十三) 年三月二十五日 [平野秀吉五十一歳、田中信太郎二十八歳程度<sup>29</sup>]

《経緯》『創立百周年記念誌「黎明」』<sup>30</sup>において、次の記載がある。「小池小学校の校歌は大正十三年三月二十五日に制定された。その時の記録について、沿革誌に次のように残っている。『三月十五日<sup>31</sup>、証書授与式ヲトシ校歌披露ヲナシ尚若林平治先生・勤続七年五ヶ月、北向ミサホ先生ノ勤続十年七ヵ月ヲ管理村長ヨリ表彰ス。尚本年高等科第一回卒業生。校歌ハ左記平野秀吉先生、作歌ニシテ作曲ハ田中信太郎先生ナリ』とあり、沿革誌の続きには読み仮名のある校歌が記載されている。また、校歌が制定された背景として、一九二二 (大正十一) 年四月一日に高等科併設許可され、七月三十一日に創立二十六周年記念式を挙行、高等科併置の祝賀式を実施し、同日に校訓及び校旗を公表している。この一連の経緯とその延長上、すなわち、高等科第一回生の卒業にあわせて校歌制定が計

画されたことが推察される。ちなみに、校旗は旧制三条中学校教諭秋保親美が考案している。秋保は新潟県立三条中学校徽章の考案者<sup>32</sup>であり、校歌の作詞者が平野秀吉であることを考えると、旧制三条中学校と小池小学校の縁は深い。

校歌制定時の校長は三代目、藤田陳平である。沿革誌によると「(職名) 訓導兼學校長、(資格) 本生<sup>33</sup>、(就任年月) 大正九年・九、(罷免年月) 大正一五年・三・三二、(棒給) 五級下 (四五円―七八円) 九年十月・五級下 (八〇円) 一二年三月・五級上 (八五円) 一二年四月・四級下 (九〇円) 一三年三月・四級上 (九二円) 一四年三月、(族籍) 島上村熊森・平民、(氏名) 藤田陳平、(生年月日) 明治二三・三・三三、(備考欄) 米納津小学校へ転勤」と記載されている。このことから、藤田陳平は一八九〇 (明治二十三) 年三月三日に島上村熊森に生まれ、本科正教員の資格を有し、一九二〇 (大正九年九月) から一九二六 (大正十五) 年三月三十一日まで訓導兼学校長として勤務。さらに俸給が四十五円から九十二円と赴任当初の約二倍になっており、一九二六 (大正十五年) 四月一日には米納津小学校に転勤していることが明らかとなった。

続いて具体的な裏付けは不明であるが、藤田陳平の略歴を示した文章を次に示す<sup>34</sup>。

<sup>29</sup> 新潟県立三条高等学校創立百周年記念誌編集委員会『創立百周年記念誌』新潟県立三条高等学校同窓会、2003、p.154。

<sup>30</sup> 本科正教員の略称。本科正教員は師範学校本科卒業者が各府県から付与される教員免許状。

<sup>31</sup> 亀井功監修・燕市吉田郷土史研究会編『越後吉田ふるさと辞典』燕市吉田郷土史研究会、2014、p.196。

<sup>32</sup> 年齢は小出浩平と同期卒業生であることから推測した。

<sup>33</sup> 記念誌委員会『創立百周年記念誌「黎明」』創立百周年記念実行委員会、1987、pp.16-20。

<sup>34</sup> 沿革誌と照らし合わせると「十五日」ではなく「二十五日」であり、転記による誤り。

明治二十三年（一八九〇）誕生。昭和三五年（一九六〇）没、享年六九歳。旧熊森郵便局（現島上郵便局）初代局長で、熊森区長であった藤田卯八郎の次男として生まれる。東京の早稲田中学校に進学<sup>35</sup>したが、父の死去により帰郷して熊森郵便局に勤務する。その後、高田師範学校に進む。卒業後県内各地の小学校に勤務する。大正一五年（一九二六）三月、校長として米納津小学校へ赴任する。それからわずか三年半後、昭和四年八月、『米納津物語』を脱稿し、同一月一五日発行する。昭和一七年、升瀧小学校（旧西川町）校長を最後に退職する。旧島上村名誉助役、島上村誌調査編纂委員、島上村公民館長、島上村教育委員などの要職を歴任する。著作に、『島上村誌前篇』（昭和二九年）、『島上村誌後篇』（昭和二二年）などがある。県内の地域史研究のパイオニアである。

注目すべきは、「高田師範学校に進む」という記載である。一八九〇（明治二十三年）三月生まれで、かつ旧制中学校中退であることを考慮すると、遅くとも明治四十年頃までには高田師範学校本科に入学し、大正のはじめには卒業していることが推察される。平野秀吉はこの頃、既に高田師範学校教諭であり、さらに舎監を兼

任していることから、藤田陳平は平野秀吉から何かしらの薫陶を受けたことが推察される。校長である藤田陳平は勤務校の校歌制定に際し、母校である高田師範学校に依頼したことが考えられる。ちなみに、藤田陳平の母はますといい、笈ヶ島（燕市）藤井五平太の長女であり、実兄は要平といい、長善館に学んだ<sup>36</sup>のち藤田家と局長を継いで正七位勲六等に叙せられている<sup>37</sup>。

#### 《校歌》

（一番） いやひこ山（やま）の  
 音（おと） さつさつの  
 村（むら） ごと家（や）ごと  
 幸（さち） ある今日（きょう）を  
 信濃川原（しなのがわはら）に  
 白皚々（はくがいがい）の  
 夕（ゆう） ばえ紅（あか）き  
 恥（は） じめ心（こころ）を  
 （三番） いざ友（とも） 日（ひ）ごと  
 校（こう） の名（な） 小池（こいけ）  
 深（ふか） きおしえを  
 ゆかん子（こ） の道（みち）  
 あけの色（いろ）  
 青（あお） あらし  
 渡（わた） るなり  
 いそしめと  
 雪（ゆき） はれて  
 野辺（のべ） はるか  
 天地（あめつち） に  
 みがかずや  
 来（き）て学（まな）ぶ  
 池水（いけみず） の  
 汲（く） みしりて  
 民（たみ）の道（みち）

② 校名 新潟県中頸城郡村立天野原尋常高等小学校（現 新潟県

<sup>36</sup> 燕市長善館史料館長 吉田勝『越北の鴻都「長善館ものがたり」人物に見る八十年のあゆみ』燕市教育委員会、2008、p.89。

<sup>37</sup> 藤田陳平『島上村誌後篇』新潟県西蒲原郡島上村公民館、1956、p.330。

<sup>35</sup> 「東京の早稲田中学に進学」の記載について、『島上村誌後篇』によると「三条中学校の開校によって、（略）藤田陳平・（略）が次々に入學」、「師範学校本科へは平原善治・藤田陳平・山崎五郎・丸山太郎次・春木佐五二・平原鼎ら、（略）が入學者」とあり、藤田陳平は三条中学、高田師範学校本科に進学したことは明らかとなったが、早稲田中学校に進学したことを裏付けることはできなかった。〔藤田陳平『島上村誌後篇』新潟県西蒲原郡分水町公民館、1955、p.91。〕

上越市立三郷小学校

《制定》一九三三（昭和八）年十月〔平野秀吉六十一歳、田中信太郎三十七歳程度<sup>38</sup>〕。

《経緯》『学び舎のうたが聞こえる—上越市内小学校校歌楽譜・歌詞集—』において<sup>39</sup>、次の記載がある。「三郷小学校は明治六年（一八七三）創立、校歌は昭和八年（一九三三）年の創立六十周年を記念して制定された。平安時代の末期に市内五智周辺に越後の国府が移される前の奈良時代には、三郷地区に国府があったと言われている。このことから、校歌の歌詞の二番はいにしえの三郷地区の姿に思いを馳せるものとなっており、故郷の歴史を子どもたちに伝えている」。

また、『三郷小学校百年のあゆみ』において<sup>40</sup>、「昭八<sup>41</sup>・一〇 校舎建築記念として校歌を制定する。作詞 平野秀吉氏、作曲 田中信太郎氏」、「昭九・五・二九 新校舎落成式を挙行」とあるため、校歌は新校舎落成前に校舎建築記念として制定されたことが明らかとなった。さらに「大一二・五・一四 本校創立五十周年記念式を挙行」とあることから、校歌制定の年は創立六十周年の年にあたる。このときの校長は、「山崎直治」である。

ちなみに、三郷小学校の卒業生として「(略) 初代の中頸城郡長

同28。

前掲18, pp. 25-26。

<sup>40</sup> 三郷小学校百年記念実行委員会『三郷小学校百年のあゆみ』三郷小学校百年記念実行委員会、1973, pp. 4, 12-13。

<sup>41</sup> 一九三三（昭和八）年。

<sup>42</sup> 一九三三（大正十二）年。

を勤められた渡部健蔵先生、(略) 仏学の大師と仰がれた島地大等先生、(略) 高崎市長に推された古木秀太郎氏、(略) 市勢の進展に努力をされている小山元二市長、(略) 高田公園内に胸像が安置されている誠実な人格者榎野直一翁」を挙げており、幾多の人材を輩出していることが明らかとなった。

《校歌》<sup>43</sup>

(一番) 火打(ひうち) 妙高(みようこう) 山(やま) 晴(は) れて

青垣(あおがき) めぐる頸城野(くびきの) に

関川(せきかわ) 銀(ぎん) を引(ひ) くほとり

村(むら) あり榮(たの) し我(わ) が里(さと) よ

土(つち) 肥(こ) え水(みず) の利(り) を兼(か) ねて

稲穂(いなほ) 黄金(こがね) の目路(めじ) 遙(はる) か

(二番) 水陸(すいりく) 衝(しょう) にあたりては

駅(うまや) 榮(さか) えし村(むら) の跡(あと)

長者ヶ原(ちようじゃがはら) の名(な) にし負(お) う

昔(むかし) に返(かえ) すよしもがな

勤儉(きんけん) 共(とも) に産(さん) を治(な) し

荒怠(こうたい) 固(かた) く誠(いまし) めて

(三番) 校旗(こうき) に示(しめ) す三郷(さんこう) の

手(て) をとり励(はげ) み睦(むつ) み合(あ) う

平和(へいわ) の姿(すがた) そのままに

高(たか) き理想(りそう) と仰(あお) ぎつつ

<sup>43</sup> 読み仮名は平成二十七年六月二十四日(水)、上越市立三郷小学校への電話調査による。

学(まな)びの道(みち)をましぐらに  
進(すす)まんいざや国(くに)のため

#### 四. 平野秀吉作詞・小出浩平作曲の校歌

(一) 小出浩平の人となり

小出浩平の経歴を示した文章は数編存在するが、ここではそのうち六編について出典年代に従って示す。

① 一九七七(昭和五十二)年十月二十五日初版発行『新潟県民百科事典』<sup>44</sup>

音楽教育家。南魚沼郡塩沢町字仙石(旧中之島村)生まれ。舞子小学校、県立高田師範(現新潟大学高田分校)本科を経て、一九二一年(大正十)東京音楽学校甲種師範科卒業。以来、音楽の啓蒙教育ならびに基礎指導に尽力。その間、西頸城郡南西海小学校<sup>45</sup>を振り出しに、香川県立香川師範、東京・赤坂小学校、城東小

<sup>44</sup> 野島出版編集部『新潟県民百科事典』野島出版1977,p.327。

<sup>45</sup> 『糸魚川市立南西海小学校百周年記念誌 百年のあゆみ』によると、小出浩平は一九一七(大正六)年三月から一九一八(大正七)年四月まで職員として勤務しており、そのときの学校名は西頸城郡西海村立南西海尋常小学校(高等科分離)である。小出浩平は一九一七(大正六)年三月に新潟県立高田師範学校本科第一部を卒業し、一年後の一九一八(大正七)年四月に東京音楽学校甲種師範科に入学していることから、東京音楽学校入学までの一年間、南西海尋常小学校で教鞭を執っていたことになる。ちなみに、南西海小学校は二〇〇五(平成十七)年四月一日に北西海小学校と統合し、現在の糸魚川市立西海小学校となる。現校歌の作詞は杉みき子氏、作曲は汐澤安彦氏が行い、岡村浩氏(新潟大学教授)が揮毫した扁額が掛けられている。〔南西海小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌編集部『糸魚川市立南西海小学校百周年記念誌 百年のあゆみ』南西海小学校創立百周年記念事業実行

学校訓導を歴任ののち、一九三七年(昭和十二)学習院教授に就任し、同時に皇太子ならび義宮(常陸宮)の音楽教育係を勤める。現在、東邦音楽短期大学教授、三室戸学園学長代行、日本学術会議員、教育音楽協会常務理事。著書『音楽教育読本』、『読譜の指導』他多数。作曲〈こいのぼり〉、〈おしし〉他多数。校歌八〇〇曲以上。(大杉信彦)

② 一九七九(昭和五十四)年十一月十八日建立「小出浩平先生顕彰歌碑」(吉祥寺(東京都文京区本駒込三十一十九一十七)境内)<sup>46</sup>

一. 明治三十年八月十四日新潟県南魚沼郡塩沢町仙石に生まれ舞子小学校高田師範学校を経て 大正十四年<sup>47</sup>東京音楽学校卒業。

一. 南西海小学校・香川師範学校・東京赤坂小学校・同城東小学校歴任・昭和十二年学習院教授に就任 皇太子殿下義宮殿下の音楽御教育係拝命 昭和廿九年三室戸学院理事・東邦音楽大学副学長の要職につき日本教育音楽協会を始め多数の会の会長として活躍。

一. この間に日本で最初の学年別基礎指導・レコードによる鑑賞

委員会1979,p.32-33,42。]

<sup>46</sup> 『小出浩平先生顕彰碑建立記念誌 こいのぼり』によると、実行委員長長の西島萬雄は「多年にわたって音楽教育に尽力され、偉大なご功績を残された小出浩平先生の顕彰碑建立の計画」をしたところ、全国各地より予想以上の賛金を得たため、郷里の新潟県(現 南魚沼市立中之島小学校校庭)と永住地東京(吉祥寺)に顕彰碑を建立し、更に残金がたため、建立記念誌を出版したと記している。〔顕彰碑建立委員会「小出浩平先生顕彰碑建立記念誌 こいのぼり」音楽之友社1981,p.3。〕

<sup>47</sup> 『東京音楽学校卒業生氏名録』によると、「甲種師範科 大正十年三月卒業」の欄に「小出浩平 新潟」とあるため、大正十四年は誤りで大正十年が正しい。〔東京音楽学校「東京音楽学校卒業生氏名録」東京音楽学校1926,p.32。〕

指導・器学指導・創作指導を音楽教育に取入れ我が国音楽教育を一変させた。また唱歌新教授法・合唱曲集・教育音楽等の多数の著書や雑誌の編集・こいのぼりおしし等の愛唱歌九百余の校歌の作曲・NHK・TBS・其の他多数のコンクールの創始・審査・更に放送講演等により日本の音楽教育を今日あらしめた功績は絶大である。

昭和五十四（一九七九）年十一月十八日

小出浩平先生顕彰碑建立実行委員会 兮成青巒<sup>48</sup>書

③ 一九八〇（昭和五十五）年七月一日発行『新潟県人名鑑』<sup>49</sup>

三室戸学園理事。（略）。〔出〕南魚沼郡塩沢町。〔生〕明治三十年

八月十四日。〔学〕旧東京音楽学校卒。〔兼〕東邦音楽大副会長<sup>50</sup>、

日本教育音楽協会長、「教育音楽」代表編集人。〔歴〕学習院教授。

④ 一九八一（昭和五十六）年八月一日発行『小出浩平先生顕彰碑

建立記念誌 こいのぼり』<sup>51</sup>

大和安雄氏が「徳栄夫人と顕彰碑」と題して次の文章を寄せている。〔略〕小出先生のご活躍は、大正の末期から素晴らしく、特に、

赤坂小学校時代に、当時歌唱一点張りの唱歌教育に、日本で初めての学年別基礎指導、レコードによる鑑賞指導、児童作曲（創作）指導、

<sup>48</sup> 大内青巒（おおうちせいらん）。明治二十八年十一月に西蒲原郡弥彦村宝

光院境内「太愚良寛上人之碑」の撰文並筆者。（渡辺秀英『いしぶみ良寛

正編（復刻版）』考古堂書店1997, pp.60, 5-63.）

<sup>49</sup> 新潟日報事業社出版部『新潟県人名鑑』新潟日報事業社, 1980, p.320.

<sup>50</sup> 副会長ではなく、副学長が正しい。

<sup>51</sup> 顕彰碑建立委員会『小出浩平先生顕彰碑建立記念誌 こいのぼり』音楽

友社, 1981, pp.6-7.

簡易楽器による合奏指導や合唱指導の開発など、音楽教育を一変させ、又、東京市の教授細目（学習指導要領）を編成して、東京市及び赤坂区長から特別表彰を受けたことは有名な逸話であります。小出先生のご功績は、私といっしょに十四年間赤坂区（現港区）氷川小学校に勤められた、小出徳栄夫人の内助の功によるものと、私は信じています。夫人は、稀にみる温情と強い責任感の持主で、昭和四年氷川小学校が火災の時、臨月もかえりみず、学校に駆けつけて消火などに活躍され、そのため急に次男を出産されました。夫人はいつも謙讓家で、職員間の融和をはかり、職員室の明るい花形でした。〔略〕家庭では先生を助け、三人のお子さんを育て、十数人の

学生を養成することに、全力を挙げておられました。〔略〕

以上の記載をまとめると次の三点に集約される。（ア）小出浩平は大正の末期から活躍し、赤坂小学校時代に、「唱歌の学年別基礎指導」、「レコードによる鑑賞指導」、「児童作曲（創作）指導」、「簡易楽器による合奏指導や合唱指導」を行い、音楽教育を一変させた。

（イ）東京市の教授細目（学習指導要領）を編成して、東京市及び赤坂区長から特別表彰を受けた。（ウ）夫人は徳栄といい、十四年

間赤坂区（現港区）氷川小学校に勤め、三人の子どもを育てた。

⑤ 一九八六（昭和六十一）年四月二十五日発行『新潟県人名鑑

一九八六』<sup>52</sup>

東邦音楽大学名誉教授。（略）。〔出〕南魚沼郡塩沢町。〔生〕明治三十年八月十四日。〔学〕東京音楽学校卒。〔兼〕日本教育音楽協会

<sup>52</sup> 新潟日報事業社出版部『新潟県人名鑑1986』新潟日報事業社出版

部, 1986, p.275.

長、「教育音楽」代表編集人。〔歴〕学習院大学教授。

⑥ 二〇〇〇（平成十二）年十月二十日発行「巻東中学校の宝物」<sup>53</sup>  
小出先生は、明治三十年（一八九七年）に南魚沼郡塩沢町字仙石の生まれ、〔略、以下は前述①に同じ〕。作曲には「こののぼり」「おしし」ほか多数あり、校歌の作曲は、千曲以上あります。栃尾高校・塩沢商工高校・高田農業高校（作詞も）・柿崎高校・羽茂高校・佐渡農業高校など、県の高校校歌作曲のほか、小・中学校校歌の作曲も手がけておられます。しかし、巻東中の校歌作曲は一〇〇一曲目にあたり、（小出浩平）先生にとっては記念すべきものだったようです。

以上の記載に従って、略歴をまとめると表2のとおりとなる。また、平野秀吉が作詞し小出浩平が作曲し、現在も歌い続けられている校歌は一曲あり、その制定年、経緯、校歌を示すと次のとおりとなる。

## （2）校歌紹介

校名 新潟県川崎村立川崎尋常高等小学校（現 新潟県長岡市立川崎小学校）

《制定》一九二四（大正十三）年十二月一日〔平野秀吉五十二歳、小出浩平四十二歳〕。

《経緯》第八代校長矢部駿蔵が創立百年史<sup>54</sup>の座談会「山なみナイ

<sup>53</sup> 飯田素州「巻東中学校の宝物」、まきの木編集委員会『まきの木七十三号』

巻町郷土資料館郷土資料館友の会2000,p.16。

<sup>54</sup> 百周年実行委員会記念史編集部『創立百年史』長岡市立川崎小学校,1973,p.14。

ンの過去現在」で校歌制定を次のように語っている。（校長の私は）「大正十三年十二月一日五十周年記念式を挙行し、校旗を制定したり、校歌（平野秀吉作詞・小出浩平作曲）を作ったり記念音楽会を盛大に挙行したことを記録しています」とある。沿革によれば<sup>55</sup>、「明治四十一年二月二十八日 長岡女子師範学校訓導兼任古志郡四郎丸川崎小学校長 木宮義男」とあり、川崎小学校は長岡女子師範学校の仮用校であるとともに、矢部駿蔵は「仮用校廃止まで三十五年間、複式学級研究の使命を帯びて設立されたものように思われる」と回想している<sup>56</sup>。ちなみに、矢部駿蔵は大正十一年三月に長岡女子師範学校訓導に任ぜられ、同十三年に川崎小学校校長を兼任、三ヶ年勤務している<sup>57</sup>。

## 《校歌》<sup>58</sup>

（一番） 鋸（のこぎり） かすむ

山（やま） なみに

早（はや） さしそめぬ

朝日影（あさひかげ）

万傾（ばんけい） 広（ひろ） き

田（た） に畑（はた） に

又（また） 今日（きょう） の日（ひ） を

いそしめと

（二番） 人（ひと） の念力（おもい） は

<sup>55</sup> 前掲54,p.2。

<sup>56</sup> 前掲54,p.14。

<sup>57</sup> 前掲54,p.14。

<sup>58</sup> 読み仮名は平成二十七年二月三日（火）、川崎小学校への訪問調査による。

栖吉川(すよしがわ)

よしや流(なが)れの

細(ほそ)くとも

自(みずか)ら彊(つと)めて

やまざらば

などかは海(うみ)と

ならざらん

(三番) 醇厚(じゅんこう)の俗(ぞく)

根(ね)を固(かた)め

勤儉(きんけん)の風(ふう)

葉(は)も茂(しげ)り

我(わ)が川崎(かわさき)に

幸(さいわ)いの

花(はな)咲(さ)け稔(みの)る

秋(あき)もあれ

#### 五. 平野秀吉・小林禮・田中信太郎・小出浩平と高田師範学校

平野秀吉が作詞した校歌に、小林禮・田中信太郎・小出浩平の三名がそれぞれ曲を付けている。平野秀吉とこれら三名の作曲者は高田師範学校を介して関係づけることができる。それを図示するとともに、その詳細を次に示す。

小林禮は一九二二(大正元)年十一月から一九二二(大正十一)年

八月までの九年十ヶ月の間、高田師範学校教諭として過(こ)しており、

平野秀吉は高田師範学校の同僚となる。このことが平野秀吉作詞の校歌に曲を提供するきっかけになったと考えられる。また、田中信太郎

は一九二三(大正十二)年九月に高田師範学校に音楽担当教員として

赴任した。この時既に、小林禮は愛知県立第一高等女学校に異動して

いる。そこで新進気鋭のバイオリニスト田中信太郎に白羽の矢が立

ち、平野秀吉作詞の校歌に曲を提供する運びになったと考えられる。

また、小出浩平は高田師範学校での学びを『新潟県上越音楽教育史資

料』<sup>59</sup>の序文に、次のとおり回想している。「略」。私が師範<sup>60</sup>に入学

した頃は、小林先生<sup>61</sup>は全国に先がけて、聴音書取りの充実、シヨパ

ンやベートーベンなどのピアノ・アルバムの片端から全曲を弾きなが

ら鑑賞する、生音楽による鑑賞音楽の工夫など、当時としては前人未

踏の新しい音楽教育を進められ、また和音訓練から入る合唱指導にも

力を入れ、私が四年になった時には『流浪の民』(小林先生の編曲、

男声四部合唱)を教えていただいた。小出浩平は一九一三(大正

二)年四月から一九一七(大正六)年三月まで高田師範学校で小林禮

や平野秀吉から指導を受け、さらに翌月から一九一八(大正七)年四

月までの一年間、高田師範学校からそう遠くない村立南西海尋常小学

校(現 糸魚川市西海小学校)で教職に就いている。さらに翌月から

一九二二(大正十)年三月まで小林禮も学んだ東京音楽学校(甲種師

範科)で指導を受け、その後、香川県立香川師範学校に赴任している。

この一連の経緯を総合的に考えると、高田師範学校の恩師である平野

秀吉の詞に、その教え子である小出浩平が曲を提供する因縁があった

と考えられる。小出浩平はとりわけ、大和安雄氏が指摘していると

<sup>59</sup> 前掲23,388p。

<sup>60</sup> 新潟県高田師範学校。

<sup>61</sup> 小林禮。

り<sup>62</sup>、「大正の末期」からの活躍が顕著であり、戦後にその活躍がもっと高まっている。その一方、折原明彦氏がその著書『校歌の風景―中越地区小中学校論考―増補版』<sup>63</sup>で指摘しているように、童謡「コイノボリ」「チューリップ」の著作（作詞者および作曲者）についての問題がある。この点は今後の研究に委ねるが、いずれにしる、小出浩平は高田師範学校で小林禮や平野秀吉から薫陶を受け、日本の音楽教育の一時代を担った巨星に育ったことは動かしがたい事実である。

## 六. 結び

小林禮と小出浩平および平野秀吉の略歴と制作校歌をまとめると、表1と2および3となる。この表とこれまで述べてきたことを総合的に考えると、次の五点に集約される。一つ目は、高田師範学校の関係者が尋常小学校および尋常高等小学校の校歌制作の一役を担ったことである。師範学校の卒業生は尋常小学校および尋常高等小学校の校長となる確率が高く、校歌制作においては母校の教員に依頼する傾向にあったことが明らかとなった。二つ目は、小林禮・田中信太郎・小出浩平の三名は平野秀吉が作詞した校歌に限らず他の作詞者に対しても曲を提供していたことである。例えば、相馬御風が作詞した新潟県内校歌百四十四曲において、小林禮は九曲、田中信太郎は二曲、小出浩平は七曲の作曲を手がけており<sup>64</sup>、三名で十八曲、全体の十二・五%

<sup>62</sup> 顕彰碑建立委員会『小出浩平先生顕彰碑建立記念誌 こののぼり』音楽之友社1981, pp. 6-7。

<sup>63</sup> 前掲1, pp. 255-261。

<sup>64</sup> 糸魚川歴史民俗資料館・相馬御風記念館『相馬御風作詞曲一覧 新潟県内校歌、新潟県外校歌』糸魚川歴史民俗資料館・相馬御風記念館, 2014, 4p。

を占めている。このことから高田師範学校は校歌制作の拠点的な性格を有していたことが明らかとなった<sup>65</sup>。三つ目は、高田師範学校には東京音楽学校で学んだ音楽の専門家が音楽担当教員として赴任しており、作曲できる人材を有していたことである。これは一九三一（昭和六）年九月の上越線開通以前において、信越線（後に信越本線）が東京と新潟を結ぶ最短の陸上ルートであり、高田は新潟県の玄関口であるとともに軍都としての機能を有し、大都市の一つとして位置づけられていたことと関係している。そのため東京の大学等を卒業した学生が高田の地へ移り住みやすい環境にあったといえる。四つ目は、小林禮や田中信太郎の活躍の中心が戦前期であるのに対し、小出浩平の活躍が戦後期にあることである。これは小出浩平が当時の皇太子殿下（現今上天皇）や義宮殿下（現 常陸宮正仁親王）の音楽教育係を拝命し、さらに日本教育音楽協会会長の要職に就いていたことと関係していると考えられる。五つ目は、高田師範学校が戦前期における音楽教育の人（教育者）と物（校歌・唱歌・演奏）を供給していたことである。これまで述べてきたように、高田師範学校が築いた音楽教育の伝統がその後の新潟大学高田分校（教育学部芸術学科）や上越教育大学の設置に大きな影響をあたえたことが容易に推察できる。それを示す文章を次に紹介し本編の締め括りとする。

<sup>65</sup> 相馬御風が作詞した新潟県内校歌百四十四曲のうち二曲は大給正夫が作曲している。『新潟県上越音楽教育史資料』によると、大給正夫は校名が高田師範学校から新潟第二師範学校に変わった「昭和十九年三月、（略）、富山県魚津女学校より着任」、専門はピアノで「昭和二十八年十月一日」までの約九ヶ年半勤務していたことが明らかとなった。『新潟県上越音楽教育研究会』『新潟県上越音楽教育史資料』新潟県上越音楽教育研究会, 1967, p. 161, 171。』



『上越音楽教育史』によれば<sup>66</sup>、戦後「新しく発足した六・三制の学  
制は著しい教員不足」を招き、それを補うために「全国の師範学校長  
は昭和二十一年に教育大学創設準備協会をつくり『教員養成は特設の  
単科大学で行うべきである』として運動を進めた」。これに対して、「昭  
和二十三年、(略)、C・I・A当局の一県一大学の方針」が指示され  
「新潟県のみを範囲とする総合大学構想」に従わざるを得なくなった。  
「昭和二十三年六月、(略)、学部構成等は人文・理・工・農・医の五  
学部」であつたが「昭和二十三年九月六日」に文部省の教育学部の設  
置要請に従い、教育学部を開設することとなつた。「新潟大学設置委  
員一行六名が来県し、新潟、新発田、長岡の視察を終え高田に来た。  
そして高田関係については芸能学科の所属を人文学部から教育学部に  
移し、三年制を四年制になおす」よう指示した。新潟大学設置準備委  
員会はこれに従い「芸能学科を教育学部に移し、四年制として高田に  
置くこと」とした。「芸能学科は、音楽・絵画・工芸・書道・体育の  
五科からなり学生数は二百名、講座十一、教授定員十一名、ほかに教  
官二十名が配置」され、「教育学部は教育学科(小・中教員養成Ⅱ新  
発田、長岡、高田、新潟)と芸能学科(高田)、家政学科(長岡)をもつ  
て構成」されることになり、「昭和二十四年六月、新潟大学教育学部  
高田分校に芸能学科が設置」されたのである。

そして、この高田分校で歌われていた校歌は平野秀吉が作詞し小林  
禮が作曲したものであり、その校歌は高田分校閉校にいたるまでずつ  
と歌い継がれていた。そこには平野秀吉が追い求めた教育への理想が  
高らかに謳われているのである。

## 七. 後記

研究をすすめるうちに明らかになつたことではあるが、平野秀吉作  
詞の校歌に曲を付けた者として、これまで述べてきた者の他に岩井清  
志と石井信夫がいることに気が付いた。この両名の動向を示した文章  
を次に紹介し、平野秀吉との関係を補足したい。「昭和十一年<sup>67</sup>、田  
中信太郎は東京音楽学校研究科へ入学するため職を辞し、岩井清志が  
茨城師範から本校に着任」<sup>68</sup>、「昭和十三年、岩井清志の転出に伴い石  
井信夫が着任した。石井は音楽学校在学中はオーボエを専攻し、吹奏  
楽や管弦楽を自ら体験していた」<sup>69</sup>、「昭和十九年三月、石井信夫の栃  
木県への転出に伴い、富山県魚津女学校より大給正夫が着任」<sup>70</sup>。以  
上の記載をまとめると次の三点に集約される。①岩井清志と石井信夫  
はともに高田師範学校の音楽担当教員。②岩井清志は田中信太郎の退  
職を受けて、一九三六(昭和十一年)年三月末に茨城師範学校から高田  
師範学校へ着任し、一九三八(昭和十三年)年まで勤務。平野秀吉との  
制作校歌は一曲。③石井信夫は岩井清志の退職を受けて、一九三八(昭  
和十三年)年に高田師範学校へ着任し、一九四四(昭和十四)年三月ま  
で勤務。平野秀吉との制作校歌は二曲。

これまで述べてきたことをまとめると、平野秀吉が作詞した校歌  
十七曲のうち、作曲者不詳を除く十五曲のうち十三曲までが高田師範  
学校の関係者の手によるものが明らかとなつた(表3)。

最後に、本研究を進めるにあたり西澤真一先生(長岡市立川崎小学

67 本文の記載により、田中信太郎は昭和十一年三月末に退職。

68 前掲23,p.161。

69 前掲23,p.161。

70 前掲23,p.162。

校長）・高田容夫先生（燕市立小池小学校長）には貴重な資料をご提供いただきました。下村省一・村山和夫両先生には高田師範学校の校歌等を教えて頂きました。亀井功先生（燕市吉田郷土史研究会）・吉田勝先生（燕市長善館史料館名誉館長）には藤田陳平の人となり、兄要平との関係について教えて頂きました。金子善八郎先生（糸魚川歴史民俗資料館）には小林禮と相馬御風の関係について教えて頂きました。新潟市立新津第一小学校、上越市立稲田小学校、上越市立三郷小学校、新潟市立巻東中学校にはご多用中にもかかわらず、校歌の歌詞の読み仮名および制作年等を教えて頂きました。川村知行先生（上越教育大学教授）には私の拙い文章を読んで頂くとともに、ご教示を賜りました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

〈筆者・千九五九一〇四二一 新潟市西蒲区桑山三二六〉

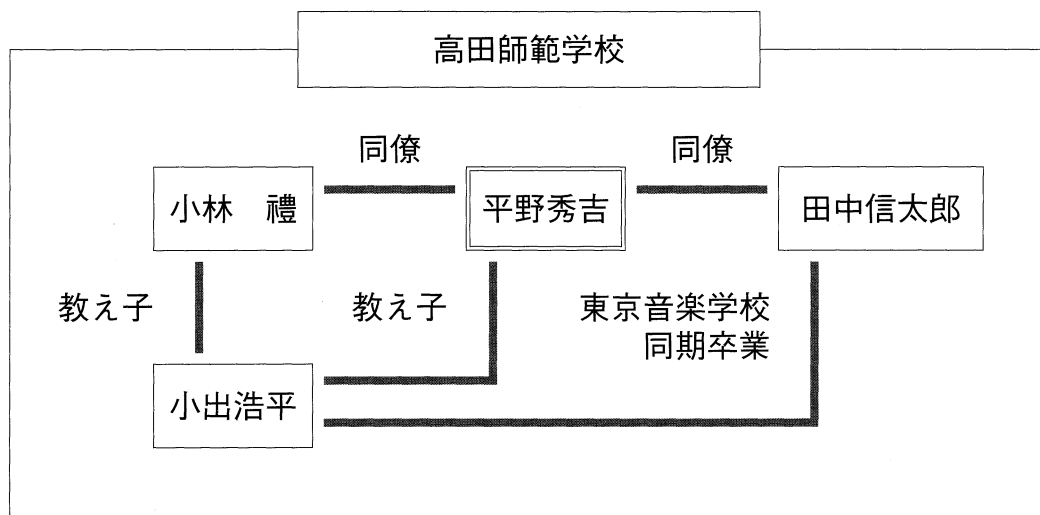


図. 平野秀吉・小林禮・田中信太郎・小出浩平と高田師範学校の関係

表1. 小林禮の略歴と制作校歌一覧

西暦(年号)	年齢	事 項	校 歌 制 定
1884(明治17)年	1歳	生れる。出生地は浅草(東京都)と柏崎市(新潟県)の2説あり。	
1885( 18)	2		
1886( 19)	3		
1887( 20)	4		
1888( 21)	5		
1889( 22)	6		
1890( 23)	7		
1891( 24)	8		
1892( 25)	9		
1893( 26)	10		
1894( 27)	11	3月、浅草区育英小学校尋常科卒業。4月、同高等科入学。	
1895( 28)	12		
1896( 29)	13		
1897( 30)	14		
1898( 31)	15	3月、高等科卒業。	
1899( 32)	16		
1900( 33)	17	東京音楽学校入学。	
1901( 34)	18	滝廉太郎氏ドイツ留学送別音楽会でピアノ独奏。	
1902( 35)	19		
1903( 36)	20	12月、東京音楽学校中途退学。その後、3年余東京で生活。本人の履歴書によれば、「ケルペル博士につき、ドイツ語、ピアノを専修し、ペリー氏につき唱歌並びに和声楽式を研究」とある。東京音楽学校でともに在籍した「高橋とよ」と結婚。	
1904( 37)	21		
1905( 38)	22		
1906( 39)	23		
1907( 40)	24	2月、山梨師範学校に音楽授業嘱託として赴任。甲府にて生活。	
1908( 41)	25	3月2日、長女英子が生れる。妻とよ肺結核にて病没。	
1909( 42)	26	師範学校・中学校・女学校唱歌科の教員免許状を取得し、山梨師範学校教諭。	
1910( 43)	27	2月、「里見いね」と再婚。10月、山梨師範学校依願退職。その後、2年間を東京(千駄ヶ谷、淀橋辺り)で生活。三越呉服店嘱託ピアノ教授として少年音楽隊を指導。	
1911( 44)	28		
1912(大正 1)	29	10月、二女正代が生れる。11月、三越呉服店を辞職。11月、高田師範学校に赴任。禮の両親とともに生活。	
1913( 2)	30		
1914( 3)	31		黒川尋常高等小学校(平成25年3月廃校)〔作詞：伊藤充美、作曲：小林禮〕。
1915( 4)	32		
1916( 5)	33	長男久が生れる。	高田師範学校(旧譜)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1917( 6)	34		
1918( 7)	35		9月22日、新潟尋常高等小学校(現新潟市立新津第一小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1919( 8)	36	禮の父母が相次いで亡くなる。本龍寺(柏崎市鶴川)に葬る。	有恒学舎(現新潟県立有恒高等学校)〔作詞：川合直次、作曲：小林禮〕。
1920( 9)	37		3月、栃尾尋常高等小学校(現長岡市立栃尾南小学校)〔作詞：遠山運平、作曲：小林禮〕(新潟県長岡市)昭和25年詞改正。
1921( 10)	38		12月20日、能生尋常高等小学校(現糸魚川市立能生小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。 大島村立大島尋常高等小学校(平成9年3月廃校)〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕。 高田師範学校(新譜)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。 安塚農業学校(現新潟県立安塚高等学校)〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕。 下条尋常高等小学校(現十日町市立下条小学校)〔作詞：丸山林平、作曲：小林禮〕。
1922( 11)	39	8月、愛知県立第一高等女学校に赴任。小林禮古校長の招きによる。10月14日、音楽会があり、相馬御風作詞、小林禮作曲の「いつこより」「地におちて」「漂う舟」が歌われる。	12月1日、稲田尋常高等小学校(現上越市立稲田小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。 5月10日、富山薬学専門学校(現富山大学薬学部)〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕。 旧出雲崎小学校〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕(新潟県出雲崎町)。
1923( 12)	40		
1924( 13)	41		
1925( 14)	42		
1926( 15)	43	4月、私立櫻菊女子学園に赴任。	
1927(昭和 2)	44	三女幸枝が生れる。	
1928( 3)	45		
1929( 4)	46		3月、岡崎中学校(現愛知県立岡崎高等学校)〔作詞：石井直三郎、作曲：小林禮〕。 春日新田尋常高等小学校(現上越市春日新田小学校)〔作詞：八波則吉、作曲：小林禮〕(昭和45年まで)。 島田尋常高等小学校(島田小学校)〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕(新潟県長岡市)。
1930( 5)	47		
1931( 6)	48		
1932( 7)	49		10月、直江津農商学校(昭和25年3月廃校)〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕。
1933( 8)	50		
1934( 9)	51		3月18日、葛巻尋常小学校(現見附市立葛巻小学校)〔作詞：手塚義明、作曲：小林禮〕。
1935( 10)	52		
1936( 11)	53		
1937( 12)	54		
1938( 13)	55		
1939( 14)	56		
1940( 15)	57		
1941( 16)	58	櫻菊女子学園教授から講師に身分変更。	
1942( 17)	59		
1943( 18)	60	5月、妻と三女幸枝を伴い大森(東京)に転居。	
1944( 19)	61	4月、腎臓病が悪化し、名古屋にて死去。葬儀は名古屋で行い、墓は本龍寺(柏崎市鶴川)。納骨及び法要は終戦直後、教え子有志、山田耕作・高折安治(ピアニスト)らの協力により、執り行われる。	上越尋常高等小学校〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕(新潟県出雲崎町)。 田海小学校〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕(新潟県糸魚川市)。 能生水産学校第一校歌〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕(新潟県糸魚川市)。 櫻菊女子学園々歌〔作詞：石井直三郎、作曲：小林禮〕。 飯倉町歌〔作詞：相馬御風、作曲：小林禮〕(昭和33年8月1日制定)。 冬の夜〔作詞：三角錫子、作曲：小林禮〕(大正5年月刊誌「楽譜界」掲載)。 栃尾東小学校〔作詞：遠山運平、作曲：小林禮〕(新潟県長岡市)。 枇杷島小学校〔作詞：神田嘉代太郎、作曲：小林禮〕(新潟県柏崎市)。 上山小学校〔作詞：伊藤充美、作曲：小林禮〕(新潟県上越市)。
年代不詳			

引用文献

- 関美智子「小林禮ものがたり―祖父の足跡を訪ねて―」関美智子,2011,75p.
- 糸魚川歴史民俗資料館・相馬御風記念館「相馬御風作詞曲一覧 新潟県内校歌、新潟県外校歌」糸魚川歴史民俗資料館・相馬御風記念館,2014,4p.
- 糸魚川西頭城小中学校PTA連合会「校歌集 校歌収録CD」糸魚川西頭城小中学校PTA連合会,2004,pp.31-32.
- 上越市有線放送電話協会「学び舎のうたが聞こえる―上越市内小学校校歌楽譜・歌詞集―」上越市有線放送電話協会,2013,pp.15-16.
- 折原明彦「校歌の風景―中越地区小中学校歌論考―増補版」野島出版,2006,校歌作詞・作曲者等一覧pp.3-14.

表2. 小出浩平の略歴と制作校歌一覧

西暦(年号)	年齢	事 項	校 歌 制 定
1897(明治30)年	1歳	8月14日、新潟県南魚沼郡塩沢町(旧中之島村)仙石に生れる。	
1903( 36)	7	4月、南魚沼郡中之島村立獅子尋常小学校入学(以降、6年間)。	
1909( 42)	13	4月、南魚沼郡中之島村立獅子尋常小学校高等科入学(以降、3年間)。	
1912( 45)	16	3月卒。〔大正5年は7月30日まで〕	
1913(大正2)	17	4月、高田師範学校本科第一部入学(以降、4年間)。	
1917( 6)	21	3月、高田師範学校本科第一種卒業。4月、西頸城郡南西海村立南西海尋常小学校教諭(大正7年4月まで)。	
1918( 7)	22	4月、東京音楽学校甲種師範科入学(以降、3年間)。	
1919( 8)	23		
1920( 9)	24		
1921( 10)	25	3月、東京音楽学校甲種師範科卒業。4月、香川県立香川師範学校に赴任。	
1922( 11)	26		
1923( 12)	27		高田市高田第三尋常小学校〔作詞:堀川寛、作曲:小出浩平〕(昭和22年、校舎が大町中学校となるまで歌われた)。
1924( 13)	28		
1925( 14)	29		
1926(昭和1)	30		第二上田尋常小学校(現南魚沼市立第二上田小学校)〔作詞:手塚義明、作曲:小出浩平〕。
1927( 2)	31		石打尋常高等小学校(現南魚沼市立石打小学校)〔作詞:手塚義明、作曲:小出浩平〕。
1928( 3)	32		
1929( 4)	33		新潟県立栃尾実業学校(現新潟県立栃尾高等学校)〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕。
1930( 5)	34		旧吉川町立源尋常小学校〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕(平成15年3月31日閉校)。
1931( 6)	35		
1932( 7)	36		
1933( 8)	37		
1934( 9)	38		
1935( 10)	39		高田市東本町尋常小学校(現上越市立東本町小学校)〔作詞:川合直次、作曲:小出浩平〕。
1936( 11)	40		
1937( 12)	41	学園院教授。皇太子殿下(現今上天皇)・義宮殿下(現常陸宮正仁親王)の音楽師教育係拝命。	塩沢尋常高等小学校(現南魚沼市立塩沢小学校)〔作詞:王井晩翠、作曲:小出浩平〕。
1938( 13)	42		川崎尋常高等小学校(現長岡市立川崎小学校)〔作詞:平野秀吉、作曲:小出浩平〕。
1939( 14)	43		
1940( 15)	44		越路町立塚山尋常小学校〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕(平成16年3月31日閉校)。 北鱒石尋常高等小学校(現柏崎市立北鱒石小学校)〔作詞:月橋正樹、作曲:小出浩平〕。
1941( 16)	45		
1942( 17)	46		
1943( 18)	47		古志郡山本村立浦瀬国民学校(現長岡市立浦瀬小学校)〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕。
1944( 19)	48		
1945( 20)	49		
1946( 21)	50		大和町立後山小学校(現南魚沼市立後山小学校)〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕。
1947( 22)	51		
1948( 23)	52		
1949( 24)	53		六日町立六日町中学校(現南魚沼市立六日町中学校)〔作詞:山田親一、作曲:小出浩平〕。 高柳町立高柳中学校(現柏崎市立高柳中学校)〔作詞:市川牧人、作曲:小出浩平〕。 松代町立孟地小学校〔作詞:小出浩平、作曲:小出浩平〕(平成26年3月31日閉校)。
1950( 25)	54		
1951( 26)	55		
1952( 27)	56		3月14日、長岡市立北中学校〔作詞:新井白郎、作曲:小出浩平〕。長岡市立表町小学校第二校歌〔作詞:堀内敬三、作曲:小出浩平〕。五十沢村立五十沢中学校(現南魚沼市立五十沢中学校)〔作詞:山田親一、作曲:小出浩平〕。 中里村立倉俣小学校(現十日町市立倉俣小学校)〔作詞:市川俊雄、作曲:小出浩平〕。能志町立木浦小学校(現糸魚川市立木浦小学校)〔作詞:小出浩平、作曲:小出浩平〕。松之山町立松之山中学校(現十日町市立松之山中学校)〔作詞:小出浩平、作曲:小出浩平〕。新潟県立高田農業高等学校〔作詞:小出浩平、作曲:小出浩平〕。 旧十日町市立吉田中学校〔作詞:丸山林平、作曲:小出浩平〕。(閉校、現小中一貫校)。
1953( 28)	57		
1954( 29)	58		
1955( 30)	59		
1956( 31)	60		旧川口町立泉水小学校〔作詞:塩谷嘉年、作曲:小出浩平〕。 長岡市立東中学校〔作詞:松岡謙、作曲:小出浩平〕。六百町立大巻中学校(現南魚沼市立大巻中学校)〔作詞:山田親一、作曲:小出浩平〕。津南町立外丸小学校〔作詞:福原龍藏、作曲:小出浩平〕。 旧川口町立川口中学校〔作詞:塩谷嘉年、作曲:小出浩平〕。 能生町立磯部中学校〔作詞:小出浩平、作曲:小出浩平〕(平成22年3月31日閉校)。 五十沢村立西五十沢小学校〔作詞:勝承夫、作曲:小出浩平〕(平成23年3月31日閉校)。
1957( 32)	61		
1958( 33)	62	4月、東邦音楽短期大学講師。	
1959( 34)	63		
1960( 35)	64		
1961( 36)	65	日本教育音楽協会理事長就任(1968年まで)。	
1962( 37)	66		
1963( 38)	67		
1964( 39)	68	三室戸学園理事。東邦音楽短期大学教授。	
1965( 40)	69	東邦音楽大学教授。	
1966( 41)	70		
1967( 42)	71		
1968( 43)	72		
1969( 44)	73	日本教育音楽協会会長就任(1985年まで)。	
1970( 45)	74	6月1日、学長臨時時代行(12月31日まで)。	
1971( 46)	75		
1975( 50)	79		
1976( 51)	80		
1977( 52)	81		
1978( 53)	82		
1979( 54)	83	11月4日、塩沢町立中之島小学校に小出浩平先生顕彰碑除幕式典挙行。 11月18日、吉祥寺(東京都文京区本駒込)境内に小出浩平先生顕彰碑建立。	塩沢町立中之島小学校(現南魚沼市立中之島小学校)〔作詞:片桐要一、作曲:小出浩平〕。
1980( 55)	84		
1981( 56)	85	8月1日、小出浩平先生顕彰碑建立記念誌こいのぼり出版。	
1982( 57)	86		
1983( 58)	87		
1984( 59)	88		3月、巻町立巻東中学校(現新潟市立巻東中学校)〔作詞:宮沢森二、作曲:小出浩平〕。 3月、巻東中音頭〔作詞:小出浩平、作曲:小出浩平〕(現新潟市立巻東中学校)。
1985( 60)	89		
1986( 61)	90	3月17日、死去。	現南魚沼市立六日町小学校〔作詞:上村義平、作曲:小出浩平〕。現南魚沼市立三小小学校〔作詞:杉田忠雄、作曲:小出浩平〕。現村上市立保内小学校〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕。旧山北町立大川谷小学校〔作詞:相馬御風、作曲:小出浩平〕(平成16年3月31日閉校)。新潟県立塩沢商工高等学校〔作詞:上村義平、作曲:小出浩平〕。旧新潟県立柿崎高等学校〔作詞:中野二三郎、作曲:小出浩平〕。旧新潟県立羽茂高等学校〔作詞:藤原健、作曲:小出浩平〕。旧新潟県立佐渡農業高等学校〔作詞:藤川忠治、作曲:小出浩平〕。

年代不詳

引用文献  
 塩沢町役場企画課「塩沢町 合併20周年記念誌」塩沢町役場,1977,pp.109-125.  
 南西海小学校創立百周年記念事業実行委員会記念誌編集部「糸魚川市立南西海小学校百周年記念誌 百年のあゆみ」南西海小学校創立百周年記念事業実行委員会,1979,pp.32-33,42.  
 増原明彦「校歌の風景—中越地区小中校歌論考—増補版」野島出版,2006,pp.255-257. 校歌作詞・作曲者等一覧pp.3-14.  
 上越市有線放送電話協会「学び舎のうたが聞こえる—上越市内小学校校歌集—」上越市有線放送電話協会,2013,pp.3-4,58.  
 糸魚川西頸城小中学校PTA連合会「校歌集 校歌収録CD」糸魚川西頸城小中学校PTA連合会,2004,p.37,53.  
 能生町史編さん委員会「能生町史 下巻」能生町役場,1986,pp.188-189,191-192.  
 糸魚川歴史民俗資料館・相馬御風記念館「相馬御風作詞曲一覧 新潟県内校歌、新潟県外校歌」糸魚川歴史民俗資料館・相馬御風記念館,2014,4p.  
 斉藤直樹「平成12年度版新潟県高等学校名鑑」共立通信,2000,p.58,73,91,97,108,111.  
 販田素州「巻東中学校の宝物」まきの木編纂委員会「まきの木73号」巻町郷土資料館郷土資料館友の会,2000,pp.15-16.  
 池田小百合「コヒノボリ」なっとく童謡・唱歌 昭和初期の童謡 唱歌 http://www.ne.jp/asahi/sayuri/home/doyobook/doyo00showa1.htm (2015/9/20閲覧)。

表3. 平野秀吉の略歴と制作校歌一覧

西暦(年号)	年齢	事 項	校 歌 制 定
1873(明治6年)	1歳	6月5日、西浦原郡巻村290番地戸に平野兵吉長男として生れる。	
1875(8)	3	10月17日、弟亥作誕生。	
1879(12)	7	6月5日、西浦原郡巻小学校入学。	
1881(14)	9		
1885(18)	13	10月、西浦原郡巻小学校授業生。	
1886(19)	14	3月26日、西浦原郡巻小学校卒業。	
1887(20)	15	4月、巻小学校を退職、西浦原郡国上村国上小学校授業生。	
1888(21)	16	4月、西浦原郡弥彦小学校授業生。	
1890(23)	18	11月1日、尋常科教員免許状受領。	
1891(24)	19	2月26日、西浦原郡灰方尋常小学校(現、燕市川前小学校の前身)訓導兼校長(18歳)。 9月、歌集「つれづれ草紙18巻」。	
1892(25)	20	3月、高等科教員免許状受領。8月、東京において大日本教育会の1ヶ月にわたる夏期講習会受講。9月27日、西浦原郡内野尋常小学校。10月、随想録「松風」「上京日記」執筆。12月27日、無試験検定により新制の小学校本科正教員免許状受領。	
1895(28)	23	7月16日、「美用文典」出版(東京吉川弘文館)。文部省検定試験合格、尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の国語科教員免許状受領。9月13日、新潟県尋常中学校授業嘱託。	
1896(29)	24	2月25日、同校助教諭。	
1897(30)	25	3月29日、水谷コトヂと結婚。新居は新潟市学校町通り2丁目。	
1898(31)	26	6月3日、文部省検定試験合格、師範学校、尋常中学校、高等女学校の漢文科、習字科免許状受領。	
1899(32)	27	2月10日、新潟県尋常中学校教諭。4月1日、新潟県中学校教諭。	
1900(33)	28	3月22日、富山県第三中学校(現、富山県立魚津高等学校)教諭。長男秀夫誕生。	
1901(34)	29	4月8日、新潟県高田師範学校教諭。作事町(現大手町)に住す。	
1902(35)	30	3月8日、長女愛子誕生。12月28日、「国語声学」出版(東京・国光社)。	
1904(37)	32	3月12日、高田師範学校舎監兼任。富士登山。9月12日、二男不二夫誕生。9月14日、父兵吉死亡。	
1905(38)	33		10月、新潟県立三条中学校(現新潟県立三条高等学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：不詳〕。
1906(39)	34	11月30日、二女下枝誕生。	
1907(40)	35		
1908(41)	36	白馬岳登山。	
1909(42)	37	1月12日、奏任待遇。7月4日、三女ナヨ子誕生。	
1910(43)	38		
1911(44)	39	10月30日、三男多聞誕生。秋より、現上越市西城町3丁目7番地(不二夫宅)。	
1913(大正2)	41	5月19日、長男秀夫死亡(享年14才)。	
1915(4)	43	4月10日、母ソチ死亡。5月15日、「綴り方教授の根本的研究」出版(東京・六公社)。 6月20日、同窓会校友会主催勲続十五年講義表彰。	
1916(5)	44	2月2日、四女幸子誕生。	新潟県高田師範学校(旧譜)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1918(7)	46		9月22日、新津尋常高等小学校(現新潟市立新津第一小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1919(8)	47	3月28日、高等官六等待遇。	
1920(9)	48		12月20日、能生尋常高等小学校(現糸魚川市立能生小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1921(10)	49	8月5日、高等官五等待遇。8月6日、依頼退職。9月30日、叙勲六等瑞宝章授与。9月30日、新潟県高田師範学校授業嘱託。	新潟県高田師範学校(新譜)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。
1922(11)	50		12月1日、稲田尋常高等小学校(現上越市立稲田小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小林禮〕。 戸野目小学校・上雲寺小学校(現上越市)〔作詞：平野秀吉、作曲：山本寿〕。
1923(12)	51	8月、「万葉集全釈」第一次原稿脱稿。	
1924(13)	52	10月3日、新潟県史跡名勝天然記念物調査委員。	3月25日、小池尋常高等小学校(現燕市立小池小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。 12月1日、川崎尋常小学校(現長岡市立川崎小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：小出浩平〕。
1927(昭和2)	55	7月15日、「日本アルプス登山案内記」出版(東京・斯文書院)。	
1928(3)	56	10月20日、「山嶽歌集勲草」出版(東京・斯文書院)。	
1929(4)	57	10月10日、「唐詩選全釈」出版(東京・東洋図書行会)。	
1933(8)	61	7月、還暦祝賀雨傘山登山。	10月、天野原尋常高等小学校(現上越市立三郷小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。
1934(9)	62	3月31日、高田師範学校授業嘱託依頼退職。10月17日、高田師範学校同窓生による胸像除幕式ならびに謝恩会。	
1937(12)	65		3月、深沢尋常高等小学校(現長岡市立深沢小学校)〔作詞：平野秀吉、作曲：岩井清志〕。
1939(14)	67	6月10日、「山嶽の歌高嶺いばら」出版(木曜会)。	
1940(15)	68		姫川原尋常高等小学校(旧校歌)(平成27年3月閉校、現妙高市)〔作詞：平野秀吉、作曲：高田守久〕。
1941(16)	69		大崩小学校(平成5年閉校、現小千谷市)〔作詞：平野秀吉、作曲：石井信夫〕。
1942(17)	70	10月4日、古稀祝賀黒熊山登山。	5月1日、箭石国民学校(昭和44年4月に統合、現糸魚川市)〔作詞：平野秀吉、作曲：石井信夫〕。
1943(18)	71	胸像供出。12月、「全釈万葉集昭和略解」完稿。	
1946(21)	74	5月6日、弟亥作死亡。6月、門下生主催金婚式祝賀(高田市大町中学校体育館)。	
1947(22)	75	5月27日、脳溢血にて倒れ、同日死亡。10月5日、「良寛と萬葉集」出版(東京・文理書院)。12月、「良寛と萬葉集」出版記念講演会。	
1948(23)		10月9日、妻コトヂ死亡。	
1951(26)		3月19日、胸像再建除幕式。	
1966(41)		9月15日、「良寛と萬葉集」増補改訂版出版(文理書院)。11月22日、「良寛と萬葉集」出版記念講演会。	
年代不詳			富岡小学校(現上越市)〔作詞：平野秀吉、作曲：不詳〕。 西能生小学校(昭和37年4月に統合・廃校、現糸魚川市)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。 桂道小学校(楨校第一分校)(昭和37年4月に統合・廃校、現糸魚川市)〔作詞：平野秀吉、作曲：田中信太郎〕。

引用文献

- 小泉孝『巻町双書第17集 平野秀吉』巻町役場,1971,pp.89-92.
- 榎田善衛『会津八一と恩師平野秀吉』、岡村鉄孝『新潟県文人研究第17号』越佐文人研究,2014,p.44.
- 折原明彦『校歌の風景—中越地区小中学校歌論考—増補版』野島出版,2006,校歌作詞・作曲者等一覧pp.3-14.
- 上越市有線放送電話協会『学び舎のうたが聞こえる—上越市内小学校校歌集—』上越市有線放送電話協会,2013,pp.11-12,15-16,25-28.
- 糸魚川西頸城小中学校PTA連合会『校歌集 校歌収録CD』糸魚川西頸城小中学校PTA連合会,2004,pp.31-32.
- 新潟県立三条高等学校創立百周年記念誌編集委員会『創立百周年記念誌 想痕』新潟県立三条高等学校同窓会,2003,p.30.
- 能生町史編さん委員会『能生町史 下巻』能生町役場,1986,p.180,184,187.